

# 健康増進のための肥満対策が有する倫理的課題—公衆衛生倫理への招待—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉手, 慎太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/23982">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/23982</a>

# 健康増進のための肥満対策が有する倫理的課題\*

## —公衆衛生倫理への招待—

玉手 慎太郎\*\*

### はじめに

近年、肥満は社会的な問題として捉えられつつある。肥満は多くの病気の原因になるものであり、それゆえ《あってはならないもの》とされつつあるが、そのことが同時に、人々の生活の一部を、社会的に介入すべき問題へと変えている。個人の自由を制限する肥満対策についての批判も聞かれるようになってきた。

これは、公衆衛生にまつわる倫理的問題、すなわち公衆衛生倫理 (Public Health Ethics) の問題である。

### 1. 日本の肥満の実態

肥満は通常、体重と身長の関係を表すBMI (Body Mass Index : 体重を身長<sup>2</sup>で割ったもの) で測られる。WHOの区分によれば、BMI30以上が肥満、40以上が超肥満とされる。国際的に比較してみると、日本の成人の肥満率は他の先進国に比べて非常に低く、アメリカでは34パーセントとなっているのに対して、日本では4パーセントである (2009年)。とはいえ過去のデータと比べると着実に上昇してきている。

日本における肥満対策として、「特定健康診査」いわゆる「メタボ検診」が挙げられる。40～74歳を対象とし、メタボリック・シンドローム (内臓脂

---

\* 本稿は東北学院大学・社会福祉研究所「第36回オープンカレッジ」(2016年6月4日)における同名の講演の報告要旨である。

\*\* 東京大学大学院医学系研究科 医療倫理学分野 特任研究員 (stamate-ky@umin.ac.jp)

肪型肥満と高血圧などとの合併状態)の早期発見を目指す。これに加えて「健康日本21」も注目に値する。これは国民の健康の増進を目的としたひとまとまりの政策方針であり、「平成27年度までに、メタボリック・シンドロームを平成20年度に対して25%減少させる」といった具体的な数値目標が挙げられている。いずれの対策も「健康増進政策」の一部と位置付けられる。これらに見られるように、いまや肥満は社会的に対処すべき問題となってきた。

## 2. 公衆衛生倫理という枠組み

国民の健康増進のための政策は「公衆衛生」の一部と位置付けられる。公衆衛生とは「人々が健康であるための条件を保証するために、我々が、社会として、集団的に行う事柄」(米国科学アカデミーによる定義)であり、それは人々の生命・健康を守るものであると同時に、個人の私的な自由を紹介するものでもある。そのため、公衆衛生政策を考える上では倫理的な枠組みが不可欠である(そうしなければ、「健康」の名の下に人々の支配が肯定されてしまうことになる、かもしれない)。

こうして、公衆衛生を考える上で「公衆衛生倫理」という領域が重要なものとして登場してくる。その課題は「健康」や「生命」といった価値と、他の様々な倫理的価値との比較考量にある。すなわち、第一には個人の「自由」と「自律」の制限の正当性が重要な争点になる。さらにそれに加えて、個人の「尊厳」、人々間の「公平性」など、人々が大事に思う様々な道徳的価値についても、健康という価値との間での比較が争点となる。

## 3. 健康増進政策の倫理的課題

肥満対策に関して、しばしば耳にする五つの疑問を挙げよう。

- (a) 自分はもうちゃんとした大人で、好きなように人生を送ってよいはず。なぜ子供のように、食生活についてあれこれ言われたいいけな

いの？：これは自律的個人の判断に対する不当な介入の可能性、すなわち「パターンリズムの懸念」である。とりわけ自律的な判断能力を有するとされる成人の生活に対する介入（強いパターンリズム）は、人々の自律に対する不当な抑圧となりうる。

- (b) 太っているのは良くないっていうのも、一つの価値観でしょう？それを国が全ての人に押し付けてしまっているの？：これは道德の法律化による人々の抑圧の可能性、すなわち「リーガル・モラリズムの懸念」である。特定の善の構想をすべての人に強制することは、それと衝突する他の善を排除することにつながり、人々の多様な生き方を否定する抑圧的なものとなりうる。
- (c) 太っているのは自分が悪い、「自己責任」だって言っていじめるけど、自分のせいじゃないこともたくさんあるのにひどくない？：これは自己責任の強調による個々人への責任転嫁の可能性、すなわち「自己責任論の懸念」である。過剰な自己責任論の下では、自身の健康を損なってしまった人はそれを自己責任として引き受けることを余儀なくされ、社会的なサポートを拒否されてしまう。実際のところ、自己責任論はしばしば公的に投入される医療費の削減を正当化する際の論拠とされる。
- (d) 悪いことをしているわけじゃないのに、太っているからって馬鹿にされたり、だらしのない人だと思われたりして、そういうのおかしくないの？：これは肥満が道徳的な悪として社会的に不利な属性とされてしまう可能性、すなわち「スティグマ化の懸念」である。スティグマとは、特定の社会的集団に対して差別や偏見が存在する際に、その被差別集団を特徴づけるしるしのことを指す。近年では肥満がスティグマと化し、太っている人々が偏見や迫害に合う事態が常態化しつつある（アメリカでは、肥満を理由として仕事上の能力を疑われることが珍しくないという）。

- (e) 健康でいるってことは僕の人生について大切なものだと思うんだけど、医療費を削減するために健康になれって言われている気がする：これは社会的な理由のために個人の健康が要求される可能性、すなわち「健康の道具化の懸念」である。健康増進の目的が当人の健康ではなく、社会全体の秩序の維持あるいは社会の発展に置かれているのだとしたら、それは当人にとっての価値を他の目的のために道具化していることになる。

## おわりに

われわれは政策担当者ではない。けれども、次のようなことに日々気をつけて生活していくのも悪くないのではないだろうか。健康でいることはなにより大事なことなのか？ 不健康な人を差別的な目で見ていないか？ 不健康なことを、その人の「自己責任」だとして冷たい目を向けていないか？ 街にあふれる健康でいよう、というメッセージは何のためのものなのか？（誰のための健康か？）

いま、《他人に迷惑をかけない限り自由に生きること》が、どんどん難しくなっているのかもしれない。これは自由の問題であると同時に、個々人を自律的な個人としてどこまで尊重するかという問題でもある。相手もまた自分自身と対等な、自律的な個人であると認めるなら、どんな風に接すべきだろうか？ 今回挙げた5つの懸念は、ただ健康のみを目的として、その健康の主体たる個人に対する尊重を軽視した結果かもしれない。健康を押し付けるのではなく、不健康を排斥するのではなく、本当の意味で「みんなが一緒に健康でいるためのしくみ」を実現するためにこそ、公衆衛生倫理が必要となる。